

## 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 <b>2805</b> 号	氏名	堀 まいさ
審 査 担 当 者	主 査	中 島 収	(印)
	副主査	内 田 政 史	(印)
	副主査	神 代 龍 吉	(印)
主論文題目： Long-term outcome of elderly patients (75 years or older) with hepatocellular carcinoma (後期高齢者肝細胞癌患者における治療後の長期予後に関する臨床研究)			

### 審査結果の要旨 (意見)

本論文研究から高齢であることが肝癌の負の予後因子であることは肝癌の治療法の選択の上でも大変興味深い。高齢者が非高齢者よりも全生存率が悪かったのは保存治療のみであった患者の占める頻度が非高齢者のそれよりも有意に高かったためと述べているが、一方で高齢者の肝予備能は非高齢者のそれより有意によい結果をあげている。では高齢者の全生存率が有意に悪かった最大の原因は何か？質問に対して高齢者と若年者の間で治療を受けなかった理由の中で最も大きな差は、肝外合併症であり、高齢者無治療例 33 例中 12 例(36%)であったのに対して、若年者は 30 例中 4 例(13%)でした。また、本人の意志で治療を受けなかった患者の割合も高齢者にやや多く、その理由の多くは高齢である、ということでした。高齢者の無治療患者に肝予備能の低い人が多かったのではなく、心疾患、脳疾患、精神疾患、肺疾患、ADL 低下の患者が多かったためと述べた。審査にあたり、副査よりの質問にも的確に回答が得られている。この論文は十分に学位に値するものと考えられる。

### 論文要旨

【目的】 後期高齢者における肝細胞癌患者では、様々な合併症が増加する。この背景が予後にあたえる影響を検討した。【方法】 久留米大学医療センターを受診した、すべての肝細胞癌患者 422 例を治療の種類、有無にかかわらず、75 才以上の患者（高齢患者：140 例）と 75 才未満の患者（非高齢患者：282 例）で比較検討した。【結果】 高齢患者で、様々な理由により積極的癌治療を受けず、保存治療のみであった患者の頻度は 33 例（24%）で、非高齢患者（30 例、11%）より、その頻度が有意 ( $p < 0.01$ ) に高かった。さらに 1、3、5、7 年の全生存率は高齢患者で 81、55、39、23%であったのに対し、非高齢患者では 85、64、49、36%と非高齢者が有意 ( $p = 0.042$ ) に良かった。しかし、積極的癌治療を受けることが出来た場合の予後では、両群間に差を認めなかった。予後因子解析では高齢、血清総ビリルビン値、血清アルブミン値、血清 DCP 値、腫瘍径、腫瘍個数、腫瘍血管浸襲、遠隔転移、癌治療の有無が有意の予後因子であった。【結論】 高齢であることは、積極的癌治療を制限する因子となっており、結果として肝細胞癌患者における負の予後因子であった。